

「誰もが安心して暮らせる町をめざして」 『認知症』に関する『ご相談をお受けします』

『認知症』は、誰にも起こりうる脳の病気によるもので、日常生活に支障をきたす状態のことをいいます。

「認知症になって恥ずかしい」、「誰に相談していいのかわからない」というふうに考え、悩んでいませんか？

『地域包括支援センター』では、認知症について正しく理解し、認知症の方や家族を温かく見守り、誰もが安心して暮らせる黒潮町をめざすとともに、地域で支える輪を広げていくための取り組みを行っており、認知症の方やその家族が抱える、介護・保健・福祉・医療などさまざまな心配ごとや悩みごとに関するご相談を受け付けています。

ひとりで悩むばかりでなく、『地域包括支援センター』へお気軽にご相談ください。

「認知症」の方や家族を、地域で支える輪を広げ、地域で繋がっていくために、家族の想いを掲載します。

『認知症の家族を抱えて勉強になったこと』

(黒潮町在住・50代・女性)

私は、一昨年末ごろから母の異変に気がつき、昨年3月に同居することになりました。

認知症と診断されたことや日常生活の変化にうるたえ、驚き、情けなさなどのショックを感じて、これから自分が母親にどのように対応しているのかわからなくなり、落ち込んでいました。

今後の自分たちの生活に大きな変化が現れたことを悩んだ末に、仕事場の上司に現状を説明し、1カ月の看護休暇を願い出て、24時間の介護をしていたのですが、認知症になった母が急によくなることはなく、ますます行動がエスカレートして、夜間の異常ともいえる行動が出てきたのです。

それからは、母の寝室の隣部屋を自分の部屋にして、襖一枚を隔てて夜間の行動が分

かるように、時間帯は関係なく、母が寢床に入ったと同時に行動を共にし、音が聞こえたら自分も起きて監視をするという生活になったのです。

その主な行動が次の状態でした。

①夜間(2時・3時)に起きて、外に置いてあるゴミバケツの中の野菜を取り出して台所に入り、漬物と思い込み、ある程度の長さに切り皿に移して食べている。

②ポータブルトイレの中の汚物が入ったバケツを左手に持ち、右手には壊れかけたハンガーを握り自室から出てきたが、汚物を溝に振り捨てる。その行動を見て、私が注意すると、右手に握っていたハンガーを私の肩に叩きつける。

③機嫌のよい日に、自分から煮物を作るといので、再々台所を覗きながら見ていたら「いい味に出来上がった、さあー食べようか」と言うのでテーブルに座り、箸をつけたのですが、調味料は全く使わず、湯の中に野菜、肉があるという状態であった。

④近所で子どもが騒いでいる

声が聞こえると、庭に走り出ていき松林に向かつて大声で「竹を持って騒ぐと人にケガをさせるけん、持たれん」と叫びながら誰もいない松林に入っていく。

⑤窓にカブトムシが止まっている、蟻が数え切れないほど窓を塞いでいると言う。

⑥鏡の前に1時間ほど座り、髪をとく、口紅をつける、ファンデーションをつけるなどの行動を何度も繰り返す。

⑦テレビの水戸黄門が大好きで、欠かさず見ていたが、集中力の低下からか「うるさい」と言いテレビを消す。

⑧人の話は全く聞かず、自分の話を3時間ほど切れ間なく話す。

などの状態(行動)が続き、私は疲れて食事をすることも嫌になり、仏壇の前で「この人を殺して、自分も死のう」という思いになりました。

皆さんにも相談してデイサービスを利用することになったのですが、本人はすぐには返事をせず、「そんな所に行くほどボケてはいない」と立腹したのです。

何とかデイサービスに通所してもらわないと自分も仕事ができなくなるので、母親に嘘をつけてケアマネさんと話し合い、「昔の話や寿司の作り方などを教えてもらいたいので、ぜひデイサービスに来てください」と話すと、それなら協力しようということになり、やっとデイサービスに行くようになったのです。

しかし、「明日からは行かん」ということにならないだろうと心配で、帰宅時間になると恐怖感が強くなっていたが、帰宅早々「明日着る服を出して準備しておく」と機嫌は良好でした。私はやっと一安心できたのです。

明朝4時に起床して、鏡の前に座り、8時の迎えが来るまで服を何度も着替えたり、顔を何度も触ったり、口紅も普段と違う明るい紅をつけて、鼻歌気分です自室から出てきた母を見て「なんと素晴らしい、まだ女であることを忘れず、

外出時には服を着替えることも忘れておらず、自分を必要としてくれる喜びがこんなに生き生きと人間を変化させるものなのか」と考えさせられたことでした。

しかし、そんなホッとしたのはつかの間のことで、母の行動はがん細胞が進行するように進んでいきました。

デイサービスでのレクリエーションがあり、盆踊りがあることを聞き「行ってみたい」と言うので、ケアマネさんと話し合い、2泊3日のショートステイを利用したのですが、盆踊りに参加して、たこ焼きや饅頭などを自宅を持って帰ろうとして、バックの中に入れたのは定かではないのですが、2日間ほど経過して誰もいないところで食べたようで、急に下痢、発熱の症状が現れ病院に入院することになったのです。

静かに治療できたのは熱のある1日だけで、次のような行動が出てきました。

■病室の窓にムカデが何匹も這っている。ハエ、蟻がいっぱいで外が見えないほど這っているなどと言う。

■他の患者さんに「点滴を抜いて今から一緒に帰ろう」とベッドの横に立ち、話しかける。

■何処から探してきたのか、バケツに水を汲んできて、ベッドに布団の上から水をかける。

■玄関から外に出て行き、何も持たずに汗をかきぼんやりと歩いていて、病院の近くの方に「何かおかしい」と病院に通報される。

このような状態(行動)があり、担当の医師に他の病院への紹介状をもらい、現在、母親は認知症病棟にいます。

入院当初は、自宅で介護していくことが家族ではないかと悩みましたが、現在では、母親も今の生活に慣れ、同じ介護度の方たちと楽しく生活しているようで、面会に行く度に笑顔で話ができています。私自身も毎日、認知症になった母親との生活と仕事では、精神的にも肉体的にもくたびれて、友人たちに声をかけていただいても泣き言ばかり話すことだろうと思っています。

家族や一人だけで悩むこと

はなく、思い切って自分の苦痛、悩み等を誰かに聞いてもらうということが大事なことでないでしょうか。

いずれは私たちも同じ状態になるかもしれない、辿る道なのです。

最初は「恥ずかしい」という思いはありますが、勇気を持ってドアを叩けば、何らかの答えは返ってきます。

地域の介護保険、地域包括支援センターなどの方たちに思い切って話す、自分の思いを少しでも聞いていただければ気持ちも楽になると思えます。

「叩かぬ太鼓は鳴らない」という言葉がありますが、まさにそれなのです。

決して自分だけでは悩まないでください。・・・ということを皆さんに伝えたい今の私です。

○お問い合わせ・ご相談
地域包括支援センター

☎ 43-2240(直通)



裁判員制度シリーズ⑨

[お問い合わせ] 高知地方裁判所 ☎088-822-0340

Q9 裁判所に行く日のどれくらい前か、その日時を知らせてもらえるのですか?

